「カイロ通信」第１号

無風の国

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長　長沢　栄治
（前信州イスラーム世界勉強会代表）

第１号　無風の国

{小鳥の天国}

当地に来てすぐのこと、4 月初めのある日の夕刻、西側にあるベランダから近くの空をながめた。前回住んだ 26 年前に比べると建物の近くに植えられている樹も背丈がずいぶん高くなった。東側のベランダ近くのヤシの樹は、その頭が上の階（日本式でいうと5階）まで届くほどになり、向かいに見える高いタワー状の建物も（ボルグ・ザマーレクという名前だったと思うが、記憶によれば私が初めてエジプトを訪れた 1978 年以来、いまだに完成していない）、もはやヤシの葉に隠れて見えない。

図３　ベランダからの風景

葉は小さいが桑の木にも似たマメ科の樹も、真ん中の部屋の窓に接するほどまでに伸びている。その豊かな葉と枝が織りなす緑の家に、朝には鳩が互いに挨拶を交わして憩い、夕には雀が群れ集って樹の小さな花をついばんでいる。そして夜が更けると、この大きな樹からは姿は見えないが渡り鳥なのか、名も知らない小鳥のきれいな声のさえずりが聞こえてくる。

今、住んでいるこのザマーレクという地区は、小鳥の天国だ。東京のハシブトガラスと違って、こちらの烏はこぶりでおとなしく、小鳥や人間を襲ったりしなそうだ。ハヤブサなどの猛禽類もここまでは来ないのではないか。路上で可愛がられてる猫たちも、わざわざ高い樹にまで登って小鳥をいじめたりしない。

そのとき夕暮れ迫る空の中に、素早く飛び交う小鳥たちの航空ショーを見た。燕だ。10 羽ほどの編隊を組んで飛ぶのもあれば、単独飛行でベランダすれすれに近づいてくるのもいる。また、番いで仲良く並飛するカップルもいる。さらに三羽で競うように飛ぶのも見たが、これは三角関係か。これから夏に向かう季節、地中海を超えてイタリア、あるいはアルプス山脈の向こうの北の国まで飛んでいくのだろうか。そんな想像をした。オスカ

ー・ワイルド作『幸福な王子』（1888 年）に登場する燕は、エジプトから飛んできたという話になっている。

エジプトで燕を前に見た記憶が鮮明にあるのは、場所は忘れたが、ナイル・デルタの廃墟となった教会だった。そのときは、もっと寒い季節だと覚えている。突然の来客に驚いて、その冬の借宿から無数の燕たちが、どんよりと曇った空に向かって飛び立った。そのせわしない鳥たちの群舞を眺めながら、何とも言えない感慨に包まれた。地中海を挟んだ人間の歴史には、いくたびもの支配的な宗教勢力の交代があった。それとはまったく無関係に続いてきた、命をつなぐ営みの尊さを、燕たちの群舞の中に見た思いがしたからである。

{無風の国}

エジプトに久しぶりの生活者として暮らし始めて、新しくあるいは改めて気がつくことがある。たとえば洗濯がそうだ。これまでの短期の調査旅行で安ホテルの洗面台での洗濯とは違って、洗濯機を使って洗いベランダに衣類を乾す。そこでいざ乾そうと思うと、洗濯バサミが見当たらない。最初にエジプトに一人で滞在した1980年代初めの頃は、こちらの頼りなさそうな木製の洗濯バサミを使っていた。

でも今回は洗濯バサミの必要はないのだという。たしかにベランダの物干し台につっかけておいても風で飛んではいかない。もちろん、これは余裕のある家でベランダの中に干す場合の話であって、普通の庶民は洗濯バサミを使って窓から張り出した物干し棚に干さないといけない（ナポリの街の風物詩に似て）。

図4　カイロローダ島南端からナイル川を望む

「無風」とはもちろん言いすぎであるが、この洗濯バサミの話が示すように、エジプトは風穏やかな国である。台風をはじめ大風、強風というものを知らない。またこれも根拠のない偏見だが、それゆえにエジプトの樹はもろい。ちょっとした強い風ですぐに折れてしまう、そんな光景をこれまでいくつか見た記憶がある。それは強い風に慣れてなく育ってきたからだなどと勝手に考えてきた。

エジプトは、こうした穏やかな気象条件に加え、日光にめぐまれた「天然の温室」である。ナイル川という枯れることのない天与の給水設備もあれば、この大河が運んでくれたアフリカ由来の沃土もある。ここで古代農業文明が生まれたのも当然である。

{イスラエル大使を追放せよ}

エジプトに着いたのは3月27日であった。ラマダーンの断食月もそろそろ終わりに近づいていた頃である。そんな中、シナイ半島を挟んでエジプトに接するパレスチナ・ガザでは信じられない虐殺が再び始まっていた。3月18日、イスラエルがハマースとの停戦協定を一方的に破って攻撃を再開したからである。

着いた翌日、せっかく現地に来たのだから、この数年さぼりがちだった現地情勢のチェックでもしようかと、ニュースのサイトをいくつか眺めていた。すると次のような刺激的なタイトルのニュース番組が目に入った。「イスラエル大使を追放せよ」(2025年3月28日配信）というユーチューブ解説 https://www.youtube.com/watch?v=JI2UA1LjQaM）である。ただし、勇ましいのはタイトルだけだった。イスラエル大使館が開く断食明けの食事（イフタール）には誰も参加しないというだけの内容である。それにしても、こんな状況の中、エジプトでイフタールを開くという、彼の国の神経の図太さには驚く。

ところで2011年革命前には、大統領がきっぱりと米国の要求を拒否した、といったニュースがたまに新聞の一面を飾ることがあった。現在は、米国に代わってイスラエルだということなのか。モロッコなど他のアラブの国では、虐殺に抗議する大規模デモが起きているが、エジプトではそんなことは起きない。「無風の国」なのである。

研究者の道に進んだ初めの頃の話だが、エジプトの新聞を読んでいてあまりに面白くないので、いつしか社会面の記事ばかり読むようになった。そのおかげで面白いテーマに出会い、何本か論文やエッセイを書くことができた。今回もそれにならって主要紙「アハラーム」の社会面の記事（オンライン）をチェックしてみた。

もちろん政治・経済面など主要記事と同じく、社会面とはいえ基本的に政府の広報という役割は、以前と変わっていない。つまりは多くの報道は、社会部記者による警察幹部への「ヨイショ記事」なのである。つまり新聞の社会面（アラビア語でいえば事件［ハワーデス］欄）は、警察の活動の広報として機能している。それでも社会が抱える問題の在処の手がかりを探しだすことはできる。

{ラマダーン月末の新聞社会面から}

エジプトを代表する「アハラーム」紙の社会面には次のようなものがあった。

≪3月29日：女性警官たちがイードの際に起きる痴漢を防ぐために巡察≫

いつ頃から始まったか分からないが、2011年革命の前の時期、ラマダーン月が終わるイードル・フィトルの祭日期間、禁欲の断食明けの解放感のためか、集団による女性たちに対する若者・少年による公道での痴漢行為（タハッルシュ）が多発し、社会問題になったことがあった［注 1]。革命の最中はなぜか収まったのか不思議である。これを考えるのは面白いテーマである。その後また再開したという話を耳にしていたのであるが、どうも現在は、この点でもエジプトの街路は「無風」状態になったようである。

その他にはこんな記事が目についた。
≪3 月 29 日：二日間で 1 万 9000 件の電線の盗難事件発生≫
≪4 月 1 日：550 万エジプト・ポンド（1650 万円）相当の麻薬を摘発≫
≪同：8 トンの精白粉・バラディー（全粒）粉の闇市場への流入を阻止≫
≪同：110 万エジプト・ポンド（330 万円）の紙幣の闇市場への流入を阻止≫
≪同：24 時間で各種交通違反 2 万 5373 件を摘発≫などなど、である。

二番目の記事の麻薬は、近代エジプト宿痾の問題である。四番目・五番目のパン用の小麦粉や通貨の闇市場の記事は、エジプト経済の構造的な困難さを示している（1 万エジプト・ポンド［3 万円相当］の現金の海外持ち出しは禁止されている、と聞いた）。一番目の電線の盗難は、事務所の掃除をしている女性がやられたと言って給金の前払いを求めてきたので、とくに庶民街に暮らす人たちにとって日常的な問題となっているようだ。最後の記事、警察がこの時期、力を入れて摘発した交通違反の件数が日本と比べて多いのかどうか分からない。

一番気になったのは、次の事件報道である。
≪4 月 2 日：2 万 1000 人の法令違反である物乞いを全国で摘発≫
そういえば、道端での物乞いや、渋滞する道路での自動車に向かってのティシュ売り、あるいは車の窓を拭いてお金を求める人たちというのをイードの期間あまり見かけなかった。恐ろしいほどの勢いで道路建設が進んでいるため、高速で走る自動車に近づけなくなったせいかもしれないと思った。でもそんなことはなくて、イードが終わると、道路の渋滞箇所にはいつもの物乞いやティッシュ売り、その他いろんな新手の物売りに路上で出会うことになった。

最初にエジプトに滞在していた 1980 年代初めの話であるが、「専門職」の乞食が、おそらく当局に許可されてであろう、路上の特定の地点で（ラムセス中央駅の歩道橋の上など場所を変えながら）「営業」していた。また、ラマダーン明けの祭日の時期に、モスクの近くを歩いていると、家族総出での物乞い集団に出会い、逃げられなくなったことも思い出す。今ではそんな光景は見かけないのかもしれない。少なくともこの高級住宅地ではなさそうである。ストリートチルドレンの問題などを短いエッセイに書いたのは2000年の頃であった［注 2］。しかし、すぐにこれらの少年少女たちは姿を隠されて（サタラ）しまった。

物乞いは生活に困った人が行なう当然の権利であり、本人たちもそれを恥とは思っていない。そのように考えていた。他方、余裕のある人たちにとって、ザカート（義務的）やサダカ（自発的）といわれる喜捨は、義捐と言うべきものであり、とくにイスラームの祭日においては推奨される行為である。こうしたテーマを扱った小説も読んだ記憶がある（乞食が来ないので困った金持ちが彼らの街を訪れると値段を上げてくれと言われた話）

［注 3］。

物乞い行為を禁止する法律的な根拠は確認していない。おそらくは「公序良俗」といった、どうでも解釈できる民法の条項に拠るのではないかと推測する。しかし、物乞い行為も、経済活動の自由の一部である。しかし、汚いものには蓋をする（繰り返し使えば「サタラ」する）という「近代的」論理の方が通用しているようである。もちろん、このような伝統的な所得の再分配で解決できる問題は限られている。

≪4 月 1 日：146 件の店舗を違反営業で摘発≫

この記事も少し気になった。店舗の違反営業の件数はそれほど多くもなく、その内容も不明である。困難な経済状況の中で、法律違反を覚悟で小営業を始めようとする人たちが出てくるのは当然である。2011 年革命後、公道での露店販売への警察の規制が緩くなったため、大手を振るって路上に店舗を構えた小商人・行商人と、既存の商店街の店主たちとの間でトラブルが多発したことがあった。切羽詰まった庶民同士の間で起きた悲しい争いごとだった。その暴力沙汰に当局が介入するのはやむを得なかったろう。しかし当時、警察的権力による上からの規制とは違う、行政的努力はどのように模索されたのだろうか。行商人たちは、公設のマーケットに店舗を強制移転させられたという。その後の状況は確認していない。

この経済をめぐる話は、次号でまた取り上げてみたいと考えています。

［注１］　後藤絵美氏の論考によると、この集団セクハラは 2006 年 10 月が最初であり、その後 2010 年から市民グループの HarassMap による防止運動が展開されたという。Emi GOTO, “Translating “Sexual Harassment” in Japanand Egypt: Conception and Perception on the Move,” *International Quarterly for Asian Studies*. Vol. 54 / 2023

［注２］　拙稿「現代エジプトの社会問題と NGO」『イスラム世界』54：2000 年（『近代エジプト家族の社会史』東京大学出版会 2019 年所収）

［注３］　アラブ・イスラーム世界における物乞いについては、保坂修司『乞食とイスラーム』筑摩書房 1994 年を参照。